

機関番号：27602
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2009～2010
課題番号：21720198
研究課題名(和文) CMCを用いた語学学習と明示的語彙・文法指導の効果的ブレンドに関する研究
研究課題名(英文) A Study on Blending CMC with Explicit Vocabulary and Grammar Instructions in Language Learning
研究代表者
荒木 瑞夫 (ARAKI TAMAO)
宮崎県立看護大学・看護学部・講師
研究者番号：20324220

研究成果の概要(和文)：

多数の参加者による時差を越えたやり取りを可能にする電子掲示板による交流は、言語の形式面の学習機会の確保が1つの課題である。特に参加者皆が自分の第二言語でやり取りする際、形式面の学習機会は別に用意する必要がある。本研究では、教室での一斉指導やオンライン自主学習プログラムを実験的に組み合わせ、また交流における学習者の語彙的ニーズを調べるべく、辞書行動調査を実施した。その結果、環境整備と学習者の自律的態度育成についての教育実践上の具体的な指針が導かれ、さらなる研究の足掛かりを得ることができた。

研究成果の概要(英文)：

An electronic forum is a useful tool for organizing an intercultural exchange among many participants living in different time zones. However, one challenge faced by language teachers while using this tool is how to create opportunities through which participants can improve the accuracy of the language they are learning. In this study, the intercultural exchange project was experimentally complemented either with a series of short explicit classroom instructions or an online grammar learning system. A survey on learners' behavior in consulting dictionaries was also conducted. The results indicated several practical suggestions that teachers can apply when creating an educational environment and enhancing learner autonomy.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：e-ラーニング、CMC、明示的指導、ブレンディング、電子掲示板

1. 研究開始当初の背景

Computer-Mediated Communication (CMC)、とりわけインターネットを用いたそれは、個人レベルでの利用でも「ノーマライゼーション」が進み、外国語学習に取り入れられることもはや少なくない。しかし、その中で学習者が何を学ぶのかについては、

使用する CMC の種類や交流相手、実践の種類等に大きく左右される面があり、評価は一樣ではない。特に欧米の文献では、学習者間のコミュニケーション、とりわけ学習中の第二言語(L2)による学習者間のコミュニケーションを、積極的に学習の契機として捉える研究は少ない。

筆者とその研究グループは、非同期的で参加者間の多様なつながりを許容する電子掲示板による多国間交流の可能性について研究してきた。学習者（日本人参加者）の言語発達に関する研究では、掲示板の交流だけでは正確さ（accuracy）の伸びは余り期待できない一方、流暢さ（fluency）は4か月程度の交流でも大きく伸びることが見出された。では、教室内で明示的な語彙・文法指導を組み合わせるブレンド学習では、正確さ（accuracy）を高めることができるのか、というのが本研究の動機である。

2. 研究の目的

Moodle の電子掲示板を用いた英語による多国間交流の実践での日本人参加者を対象とし、主に言語の形式面の学習にしばってその発達を観察する。参加者は交流において、第二言語である英語を大量に使用する機会があるが、そこに明示的な語彙・文法指導をブレンドする。

いかなる指導方法が効果的で、どのような語彙・文法項目の正確さの伸びが顕著であるかを見出し、この種の実践の一つの目安を提示することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 参加者 ($N=90$) を、教室での明示的語彙・文法の一斉指導実施群と、非実施群とに分け、一斉指導と交流での自律的ライティング作業のブレンド学習の効果を見る。実施群の参加者には、1回15分～20分のワンポイント教室一斉指導を計9回行う。各回には、それまでの交流で比較的多く誤用が見られた語彙・文法項目を選び、解説の上、簡単な英作文を行い、その場で添削をする。非実施群では個別指導の時間をその分とり、参加者の質問に答えながらの学習支援を中心に行う。また、指導項目の中で、より確実に学習された項目と、この種のブレンド学習では習得が難しい項目の特徴を分析する。（2008年度の実践に基づく）

(2) 参加者 ($N=101$) に、時間と場所を問わず学習できるオンラインの自習文法教材（(株)教育測定研究所によるCASEC-GTS®）を提供し、その学習量と事前・事後の語彙・文法テスト（(1)と同じもの）の相関を見ることで、テストスコアを上げるために必要な学習量を推定する。（2009年度の実践に基づく）

(3) 参加者の辞書行動を調査する。交流に使用する Moodle 内に「辞書行動調査ブロック」を設置し、参加者の使用は任意とし、ブロックを使用する際は、ユーザ ID と検索語が記録される旨を参加者に説明の上、予め同意を得る。英文を作る時の辞書の検索語をデータ

ベースに取り、英文を組み立てるにあたって、学習者がどのような語句を辞書に頼っているかを調べる。（2010年度の実践に基づく）

ブロックの作成は Mitstek コンサルティングに依頼した。

4. 研究成果

(1) 教室内での一斉指導が、学習者の中間言語の正確さ向上に対する効果は確認されたものの、その方法で習得が促され得る語彙・文法項目は限定的であることが示された。

既存のクラス分けを使用したため、そもそも実施群 ($n=47$) と非実施群 ($n=43$) は英語習熟度に関して差が存在したが（6ヵ月前のテストにて後者が前者より平均点が高かった）、実施群 ($n=43$) の平均点において、1.2ポイントの上昇が見られ ($t=4.17, p<.001$)、非実施群では0.7ポイント ($t=-2.79, p<.005$) で、わずかな違いしかなかった。

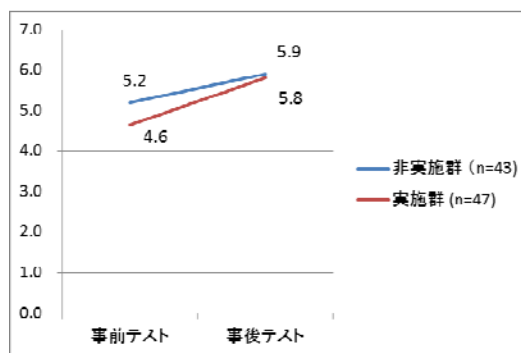


図1 一斉指導実施群・非実施群の伸び(指導項目のみ)

また、一斉指導で採り上げた9つの文法項目の中で、実施群において相対的に他の項目に比べ伸びが顕著だった項目には次のような特徴が見られた。

- 比較的定型的 (formulaic) でイディオマティックな項目
- 話し相手を前提とする対人的なコンテキストで用いられる表現

一連の結果から、教室内一斉指導は、学習項目の定着に課題があり、その時に習った項目が、その後間もなく交流でのライティング場面で使えるとは限らないということが示された。

(2) 文法教材の学習量とテストスコアの伸びとの相関は見られなかった ($r=0.089$)。そもそもこの点に単純な線的な関係を想定することには慎重であるべきが、他の参加者に比べ飛びぬけて多量に教材をこなした少数の参加者はテストの伸びが見られる傾向があった。CASEC-GTS®の教材数で130以上、時

間数にして学習総時間計4時間以上の学習者には、スコアの上昇が見られた。

このことから、基礎力としての正確さを身につける文法学習には、相応の時間がかかるという事実を示唆しているともいえる。

(3)「辞書行動調査ブロック」によって、全267の辞書検索例データが集まった(協力者29名)。うち日本語(和英辞書の使用)が218例、英語(英和辞書の使用)が49例で、やはりライティングが主のため日本語の検索例が多かった。日本語の検索例では、①「基本語」が最も多く(44%)、次いで「看護・健康」に関わる語が続いた(24%)。「生活」や「感情表現」関連の語句がその後に続いた(それぞれ18%、6%)。①には、「だから」「よって」「また」「このような」「つまり」「ところが」などの接続表現が多く含まれていた。また、それらの検索例は習熟度が比較的入門レベルに近い学習者によってなされていた。

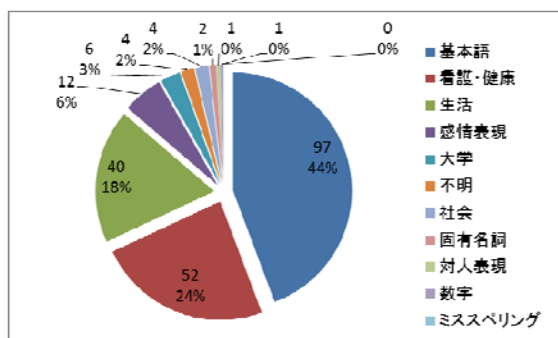


図2 参加者による日本語の検索例の分類

この調査より、習熟度が比較的入門レベルに近い学習者は、日本語を逐語的に英語に置き換え、表現の工具箱としてのチャンクの理解への支援が必要であることが示唆された。

(4) 今後の研究にむけて

今回の一連の結果から、学習者の基礎的な文法理解には時間がかかること、習熟度または学習の諸過程でのニーズが異なることが推定できる。短時間の一斉指導は、交流という対人的なコンテキスト特有の表現で、比較的定型的(formulaic)なものに向いている。

一方、基礎的でより深いレベルでの語彙・文法理解には、そのための気づき(awareness)を学習者にもたらしに十分な時間と、学習者自身で仮説検証が行えるコンテキストが必要であると思われる。CMCを用いた「英語を使う」交流とのブレンドのためには、語彙・文法の明示的指導・学習は次の点を押さえる必要があるものと思われる。

①習熟度別の学習支援プランの準備

とくに入門レベルに近い学習者に対する

支援として、CMCでの発話が日本語の逐語訳にならないよう、英語独自の表現の型(チャンク)への理解を促す支援が必要である。それには必然的に相応の時間がかかり、リーディングなどの言語理解の量も確保が必要であろう。その上で、日本語と英語の発想自体が違うことを図などで明示した指導などに効果が期待できる可能性がある。

②自律的学習を可能にする学習環境の準備

本研究は、欧米で多い母語話者(NS)を相手とするCMCを通じた学習に対して、CMC上はNSなしに正確さ(accuracy)の向上を図ることの可能性の考察でもあった。NSは言語使用のある種の手本(正確さを備えた1つのモデル)として当該言語の学習に極めて有用であることは間違いなく、その意味でのインプットの質の担保としては、CMCにNSを加えるという選択肢がある。その一方で、学習者が仮説検証ができるような学習環境を用意することが必要である。CASEC-GTS®のような教材を組み合わせることも1つの方法だが、学習者の側に仮説検証の手順と資料を与える方向でも解決に近づけるだろう。

今回の研究では、狭い意味での言語学習(形式面の学習)に焦点を絞ったが、CMCを用いた交流を通しての言語の学びの特徴は、むしろ異文化や内容面の学びと不可分の点にある。より広い視点にたった学びの可能性の追求と評価も今後必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 荒木瑞夫「オンライン異文化交流における語彙・文法学習のデザインの試み—その可能性と課題—」『ESPの研究と実践 第9号』、査読無、2010、40-51
- ② 山内ひさ子、安浪誠祐、荒木瑞夫「ICTとESP」『LET Kyushu-Okinawa Bulletin No. 11』、査読有、2011、35-52

〔学会発表〕(計7件)

- ① 荒木瑞夫「CMCと語彙・文法指導のブレンドについて—看護大学生への実践から—」大学英語教育学会九州沖縄支部 第13回ESP研究会(2009年5月16日、熊本大学 大学教育機能開発総合研究センター)
- ② 荒木瑞夫、白坂佳代、エリック・ラーソン「英語ライティング交流における語彙・文法指導とその効果：より効果的なブレンドに向けて」外国語教育メディア学会(LET)九州・沖縄支部 第39回支

部大会 (2009年6月6日、長崎県立大学
シーボルト校)

- ③ 荒木瑞夫「Moodleを用いた英語学習のための異文化交流サイトの運営」
MoodleMoot Hakodate 2010 (2010年2月13日、公立ほこだて未来大学)
- ④ 山内ひさ子、安浪誠祐、荒木瑞夫「ICTとESP」外国語教育メディア学会 (LET) 九州・沖縄支部第40回支部大会 (2010年6月6日、長崎ハウステンボス)
- ⑤ Tamao Araki “Blending an Inter-cultural Exchange with Explicit Grammar/Vocabulary Teaching” CALICO 2010 (2010年6月12日、Amherst College, アメリカ合衆国マサチューセッツ州)
- ⑥ 荒木瑞夫、エリック・ラーソン、白坂佳代「CMCを用いた異文化交流における言語形式面での学習支援について」外国語教育メディア学会 (LET) 第50回全国大会 (2010年8月6日、横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校)
- ⑦ 荒木瑞夫「患者の語りの分析－糖尿病患者のコーパスを用いた試み」大学英語教育学会九州沖縄支部 第15回ESP研究会 (2010年11月6日、熊本大学 大学教育機能開発総合研究センター)

〔産業財産権〕

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

〔その他〕

「初級科目と上級科目連携の看護にまつわる異文化コミュニケーション教育」(寺内一・山内ひさ子・野口ジュディー・笹島茂「21世紀のESP－新しい理論の構築と実践」(英語教育学体系第4巻), pp.179-183, 大修館書店)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荒木 瑞夫 (ARAKI TAMAO)
宮崎県立看護大学・看護学部・講師
研究者番号：20324220

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし